

青鼻せいふ五貫文給ひ候ひ畢んぬ。

夫それ五戒の始めは不殺生戒、六波羅蜜はらみつの始めは檀波羅蜜なり。十善戒・二百五十戒・十重禁戒等きんかいの一切の諸戒の始めは皆不殺生戒なり。上大聖より下蚊虻もんもウに至るまで命いのちを財たからとせざるはなし。これを奪へば又第一の重罪なり。如来、世に出で給ひては生をあわれむもとを本とす。生をあわれむしるしには命せしきを奪はず。施食せじきを修するが第一の戒にて候なり。人に食を施すに三の功德あり。一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く。命をつぐは、人中天上に生まれては命長きの果報を得、仏に成りては法身如来と顕はれ、其の身虚空と等し。力を授くる故に、人中天上に生まれては威徳の人と成りて眷属けんぞく多し。仏に成りては報身如来と顕はれて蓮華うてなの台うてなに居し、八月十五夜の月の晴天に出でたるが如し。色をます故に、人中天上に生まれては三十二相を具足して端正なる事華の如く、仏に成りては応身如来と顕はれて釈迦仏の如くなるべし。

夫須弥山それしゆみせんの始めを尋ぬれば一塵なり。大海の初めは一露なり。一を重ぬれば二となり、二を重ぬれば三、乃至十百千億阿僧祇あそうぎの母は唯一なるべし。されば日本国には仏法の始まりし事は天神七代・地神五代の後、人王百代其の初めの王をば神武天皇と申す。神武より第三十代に当たりて欽明天皇ぎょうの御宇に、百済国より経並びに教主釈尊みえいの御影、僧尼等を渡す。用明天皇の太子じょうくうの上宮と申せし人、仏法を読み初め、法華経を漢土よりとりよせさせ給ひて疏しよを作りて弘めさせ給ひき。それより後、人王三十七代孝徳天皇の御宇に、観勒僧正かんろくと申す人、新羅国しらぎより三論宗・成実宗を渡す。同じき御代に道昭と申す僧、漢土より法相宗・俱舎宗を渡す。同じき御代しんじょうに審祥大徳、華嚴宗を渡す。第四十四代元正げんしょう天皇の御宇に、天竺の上人、大日経を渡す。第四十五代聖武天皇の御宇に、鑑真和尚と申せし人、漢土より日本国に律宗を渡せし次いでに、天台宗の玄義・文句・円頓止観えんどんしかん、浄名疏等じょうみょうしよを渡す。然れども真言宗と法華宗との二宗をばいまだ弘め給はず。人王第五十代桓武天皇の御代に、最澄と申す小僧あり、後には伝教大師と号す。此の人、入唐已前に真言宗と天台宗の二宗しやうしよの章疏を十五年が間但一人見置き給ひき。後に延暦二十三年七月に漢土に渡り、かへる年の六月に本朝に著かせ給ひて、天台・真言の二宗を七大寺せきがくの碩学数十人に授けさせ給ひき。其の後、今に四百年なり。総じて日本国に仏法渡りて今に七百余年なり。或は弥陀の名号、或は大日の名号、或は釈迦の名号等をば、一切衆生に勧め給へる人々はおはすれども、いまだ法華経の題目南無妙法蓮華経と唱へよと勧めたる人なし。日本国に限らず、月氏等にも仏滅後一千年の間、迦葉かしょう・阿難あなん・馬鳴めみょう・竜樹・無著・天親等の大論師、仏法を五天竺に弘通せしかども、漢土に仏法渡

りて数百年の間、^{まとうか}摩騰迦・^{じくほうらん}竺法蘭・羅什三蔵・南岳・天台・妙楽等、或は疏^{しよ}を作り、或は経を釈せしかども、いまだ法華経の題目をば弥陀の名号の如く勧められず。唯自身一人計り唱へ、或は経を講ずる時講師計り唱ふる事あり。然るに八宗九宗等、其の義まぢまぢなれども、多分は弥陀の名号、次には観音の名号、次には釈迦仏の名号、次には大日・薬師等の名号をば唱へ給へる高祖先徳等はおはすれども、何なる故有^{いか}ってか、一代諸教の肝心たる法華経の題目をば唱へざりけん。其の故を能く能く尋ね習ひ給ふべし。譬へば大医の一切^{やまい}の病の根源、薬の浅深は弁へたれども、故なく大事の薬をつかふ事なく病に随ふが如し。

されば仏の滅後、正像二千年の間は煩惱の病軽かりければ、一代第一の良薬の妙法蓮華経の五字をば勧めざりけるか。今末法に入りぬ。人毎に重病有^{ごと}り。阿弥陀・大日・釈迦等の軽薬にては治し難し。又月はいみじけれども、秋にあらざれば光を惜しむ。花は目出たけれども、春にあらざればさかず。一切時による事なり。されば正像二千年の間は題目の流布の時に当たらざるか。又仏教を弘むるは仏の御使ひなり。随つて仏の弟子の譲りを得る事各別なり。正法千年に出でし論師、像法千年に出ずる人師等は、多くは小乗・権大乘・法華経の或は迹門、或は枝葉を譲られし人々なり。いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩、世に出現し給はず。此の人末法に出現して、妙法蓮華経の五字を一閻浮提^{えんぶだい}の中、国ごと人ごとに弘むべし。例せば当時日本国に弥陀の名号の流布しつるが如くなるべきか。

然るに日蓮^{いず}は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。持戒破戒にも欠けて無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊^{ごよう}の如くなる者なり。何にしてか申し初めけん。上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華経の五字を、先立ちてねごとの様に、心にもあらず、南無妙法蓮華経と申し初めて候ひし程に唱ふるなり。所詮よき事にや候らん、又悪事にや侍らん、我もしらず人もわきまへがたきか。但し法華経を開きて拝し奉るに、此の経をば等覚の菩薩・文殊・弥勒・観音・普賢までも輒^{たやす}く一句一偈をも持つ人なし。唯仏与仏と説き給へり。されば華嚴経は最初の頓説、円満の経なれども、法慧等の四菩薩に説かせ給ふ。般若経は又華嚴経程こそなれども、当分は最上の経ぞかし。然れども須菩提^{しゅぼだい}これを説く。但法華経計りこそ、三身円満の釈迦^{こんく}の金口の妙説にては候なれ。されば普賢・文殊なりとも輒^{たやす}く一句一偈をも説き給ふべからず。何に況んや末代の凡夫我等衆生は一字二字なりとも自身には持ちがたし。諸宗の元祖等法華経を読み奉れば、各々其の弟子等は我が師は法華経の心を得給へりと思へり。然れども詮を論ずれば、慈恩大師は深密経・唯識論を師として法華経をよみ、嘉祥^{かじょう}大師は般若経・中論を師として法華経をよむ。杜順^{とじゆん}・法蔵等は華嚴経・十住毘婆沙論を師として法華経をよみ、善無畏・金剛智・不空等は日経を師として法華経をよむ。此等の人々は各法華

經をよめりと思へども、未だ一句一偈もよめる人にはあらず。詮を論ずれば、伝教大師ことはりて云はく「法華經を讚むと雖も還つて法華の心を死す」云云。例せば外道は仏經をよめども外道と同じ。蝙蝠が昼を夜と見るが如し。又赤き面の者は白き鏡も赤しと思ひ、太刀に顔をうつせるもの円かなる面をほそながしと思ふに似たり。

今日蓮は然らず。已今当の經文を深くまぼり、一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勧む。麻の中の蓬、墨うてる木の自体は正直ならざれども、自然に直くなるが如し。經のまゝに唱ふればまがれる心なし。当に知るべし、仏の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へがたきか。又それ他人の弘めさせ給ふ仏法は皆師より習ひ傳へ給へり。例せば鎌倉の御家人等の御知行、所領の地頭、或は一町二町なれども皆故大将家の御恩なり。何に況んや百町千町一國二國を知行する人々をや。賢人と申すはよき師より傳へたる人、聖人と申すは師無くして我と覚れる人なり。仏滅後、月氏・漢土・日本國に二人の聖人あり。所謂天台・伝教の二人なり。此の二人をば聖人とも云ふべし。又賢人とも云ふべし。天台大師は南岳に傳へたり、是は賢人なり。道場にして自解仏乘し給ひぬ、又聖人なり。伝教大師は道邃・行滿に止觀と円頓の大戒を傳へたり、これは賢人なり。入唐已前に日本國にして真言・止觀の二宗を師なくしてさと極め、天台宗の智慧を以て、六宗七宗に勝れたりと心得給ひしは是聖人なり。然れば外典に云はく「生まれながらにして之を知る者は上なり。上とは聖人の名なり。學んで之を知る者は次なり。次とは賢人の名なり。」と。内典に云はく「我が行、師の保け無し」等云云。

夫教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり。天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし。馬鳴・竜樹・無著・天親等、老子・孔子等は、或は小乘、或は権大乘、或は外典の聖賢なり。法華經の聖賢には非ず。

今日蓮は聖にも賢にも有らず。持戒にも有智にも有らず。然れども法華經の題目の流布すべき後五百歳・二千二百二十余年の時に生まれて、近くは日本國、遠くは月氏漢土の諸宗の人々唱へ始めざる先に、南無妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふる間、或は罵られ、打たれ、或は疵をかうほり、或は流罪に二度、死罪に一度定められぬ。其の外の大難数をしらず。譬へば大湯に大豆を漬し、小水に大魚の有るが如し。經に云はく「而も此の

經は如来の現在にすら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや」と。又云はく「一切世間怨多くして信じ難し」と。又云はく「諸の無智の人有りて悪口罵詈訾」と。或は云はく「刀杖瓦石を加へ或は数々擲出せらる」等云云。此等の經文は日蓮日本國に生ぜずんば、但仏の御言のみ有りて其の義空しかるべし。譬へば花さき菓ならず、雷なりて雨ふらざらんが如し。仏の金言空しくして、正直の御經に大妄語を雜へたるなるべし。此等を

以て思ふに恐らくは天台・伝教の聖人にも及ぶべし。又老子・孔子をも下しぬべし。日本国の中に但一人南無妙法蓮華經と唱へたり。これは須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人三人十人百人、一国二国六十六箇国、已に島二つにも及びぬらん。今は謗ぜし人々も唱へ給ふらん。又上一人より下万民に至るまで、法華經の神力品の如く、一同に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もやあらんずらん。木はしづかならんと思へども風やまず。春を留めんと思へども夏となる。

日本国の人々は、法華經は尊とけれども、日蓮坊が悪ければ南無妙法蓮華經とは唱へまじとことはり給ふとも、今一度も二度も大蒙古国より押し寄せて、壹岐・対馬の様に、男をば打ち死し、女をば押し取り、京・鎌倉に打ち入りて、国主並びに大臣百官等を搦め取り、牛馬の前にけたて、つよく責めん時は、争でか南無妙法蓮華經と唱へざるべき。法華經の第五の巻をもて日蓮が面を数箇度打ちたりしは、日蓮は何とも思はず、うれしくぞ侍りし。不輕品の如く身を責め、觀持品の如く身に当たって貴し貴し。但し法華經の行者を悪人に打たせじと、仏前にして起請をかきたりし梵王・帝釈・日月・四天等、いかに口惜しかるらん。現身にも天罰をあたらざる事は、小事ならざれば始中終をくゝりて其の身を亡ぼすのみならず、議せらるゝか。あへて日蓮が失にあらず。謗法の法師等をたすけんが為に、彼等が大禍を自身に招きよせさせ給ふか。

此等を以て思ふに、便宜ごとの青鳧五連の御志は日本国に法華經の題目を弘めさせ給ふ人に当たれり。国中の諸人、一人二人乃至千万億の人、題目を唱ふるならば存外に功德身にあつまらせ給ふべし。其の功德は大海の露をあつめ須弥山の微塵をつむが如し。殊に十羅刹女は法華經の題目を守護せんと誓はせ給ふ。此を推するに、妙密上人並びに女房をば母の一子を思ふが如く。犖牛の尾を愛するが如く、昼夜にまぼらせ給ふらん。たのもしたのもし。事多しといへども委しく申すにいとまあらず。女房にも委しく申し給へ。此は諂へる言にはあらず。金はやけば弥色まさり、劍はとげば弥利くなる。法華經の功德はほむれば弥功德まさる。二十八品は正しき事はわずかなり。讚むる言こそ多く候へと申し食すべし。

閏三月五日

日蓮花押

くわがやつ
福谷妙密上人御返事